

縁というものは 案外近くにあるらしい

宇野 肇

※未成年の方の閲覧・所持を固くお断りします。
また本データの無断複製、複写、転載、翻訳、
オークションやフリマアプリへの出品は
おやめください。

幼馴染みが国を出たら、急にモテ期が来ました。……………3

ジェイド……………46

ハサン……………61

シヨウゴ……………73

レオ……………99

鉢合わせ……………121

幼馴染みの言うことには……………130

ジェイド・身体も心も繋がる日……………136

ハサン・暴かれたのは誰の、どこか……………157

シヨウゴ・待てはほどほどに……………190

レオ・もぎ取った果実の味は……………210

幼馴染みが国を出たら、急にモテ期が来ました。

自慢の幼馴染みがいる。

アニエス。特級冒険者として騎士団でさえ一目おくほどの女傑。

力自慢で勇敢で、幼い頃から彼女を慕って後をつけて回った。

けれどいつからか彼女が好きな理由が『格好いいから』だと気づいた時。

彼女は女性で、俺は男性だと気づき始めた十二歳。俺は自分が『男に抱かれたい』人間だと、分かってしまった。

気づくのが遅かったのは、性に対するあれやこれやへの興味が湧くよりもずっと前から彼女が好きだったから。彼女の身体がふっくらとして、他の少女達が化粧を嗜む頃になっても彼女は剣を振ってモンスター討伐に出かけるのが好きのままであつたし、俺もそれに付き合つた。

アニエスは、俺が無理をして強くなろうとするのを咎めた。命の危険があるなかで、身の丈に合わないことは死を早める。

その頃俺はモンスターを狩り始めた彼女に遠く及ばず、指導してくれる先輩冒険者からも討伐へ行く許可をもらえていなかった。生傷が絶えなくて、酷く心配を掛けたものだ。でも、そんな俺に彼女は根気強く言い聞かせた。

「そのままでもいい。そのままのお前で、のびのびやれることがきつとある。だから無理なんてしなくていいんだ。戦うのは私がやる」

自分が男が好きで、男に抱かれない男だと気づくのが遅れたのは、彼女のそんな言葉で俺の自己肯定感が盛りに盛られたからだと思う。

幸か不幸か、気づいてからも俺たちの関係は近くもならず、遠くもならなかった。俺がそこそこに強くなつて、彼女とパーティを組んで討伐に出かけることができるようになって。でも十八の頃、あまりの実力の差に俺から解散を持ちかけた。彼女がのびのびと戦うのを制限したくなかったし、そうすると俺はとてじやないがついて行けなかったからだ。

今でもアニエスのことは好きだ。幸せになつてほしいと思うし、そのために俺ができることがあるなら手を尽くす気持ちでいる。

だから彼女が

「結婚相手を探しに旅に出る」

と、そう言って突如国を出ると教えてくれたのは、まさに青天の霹靂だった。

「お前がニールか？　なんだ、アニエスの好い男だと聞いていたのに普通の野郎じゃねえか」

「お？　戦やつとくか？」

その日もいつも通り家のことを片付けていた。男の一人暮らしだ、自分のことは自分でやる。

道具屋を営んでいた親父に興味があるならお前もやってみるかとおれこれ叩き込まれつつ、しかし次男坊であるため冒険者として身を立てつつやってきた。道具屋としてのメンテナンス技術と鑑定知識、そして冒険者としての経験を見込まれ、パーテイ解散を機に職人に転向して三年。

生憎の雨の日。家の表にある小さな倉庫で道具の整理をしていると、突然現れた男に不遜な物言いをされて俺は眉をひそめた。

「はん。前線から退いて長いんだろ？　いつまでもでけえ顔してんじゃねえ」いきなりやってきてなんのことだろうか。口ぶりから年下のようにも見えるが、単に経験の浅い冒険者のようにも見える。

疑問に思いつつ、ここは一発強くいっとかと拳を振った。ひゅ、と空気を裂く音が微かに響いて、空を切る。

悪くない音が出たな、と思いつつ、拳を避けた男の体勢を更に崩すように足払いを掛けた。それも避けられるが、想定済みだ。

受けるには強い程度の勢いで次々に拳を当てに行く。時に足を大きく蹴り上げつつ、距離を取ったり、詰めたりしながら様子を観察する。割と熟れた動きで俺の隙を窺っているが、俺に対する前のめりな『気概』が強い。

「はっ、単調だな！ やっぱりたいしたことな——」

「オラッ！」

「ぎゃん！」

攻撃のリズムを崩した瞬間、それを隙とみて懐に潜り込もうとしてきた男の頭を鷲掴みにして素早く地面に叩きつけると、キツそうな声を出しながら男は濡れた土に額をめり込ませた。

装備もない状態のため相手へのダメージはしれたものだが、伊達に特級冒険者の側で生きてきたわけじゃない。アニエスに少しでも追いつきたくてがむしやりに強くなろうとした過去は、こういう時物凄く役に立ってくれる。

「なんの用か知らんが、アポ無しポの冷やかしは断っている」

しとしとと降り続ける雨の中、このまま倉庫で片付けをするのは難しそうだし、ギルドから頼まれた鑑定依頼品を見る方向で予定を組もうと足を向け

た瞬間、足首を掴まれた。

「……冷やかしがアポなんかとるかよ……」

「元氣そうで何より。じゃあな」

思いがけず強い力で掴まれたことに少々驚いたが、遠慮なく足を引き抜き、男の手を踏みつける。

「いでえ！ 悪い！ 悪かった！ 冒険者組合のギルドマスターからあんたにアニエスのことを聞くように言われて来たんだ！ このままじゃ帰れねえし話を聞かせてくれ！」

「レオから？」

ぴいぴい喚く男の打たれ強さに感心しつつ、俺は恩のある人の遣いだという男を凝視した。無論家の軒下で、だ。

……そういえばこの男、どこかレオ……男が言う冒険者組合の頭取とうどり・ギルドマスターに似た雰囲気がある。浅黒い肌なんて珍しいものでもないし、そこそ長い黒髪も、無駄がなさそうな体型も、似ても似つかないはず。ああでも、吸い付かれたらたまらなく良さそうなくらと厚い唇が——と、考えたところで頭を振った。これ以上はマズい。

男は立ち上がると、しれつと軒下までやってきた。顔は土で汚れているが、

まあまあの色男だ。この手のタイプは大体が女好きだと相場が決まっている。

「はあ。えらい目に遭った」

「仕掛けてきたのはそっちだが」

白々しい男の様子に、人はやはり中身だなとしみじみ思う。だが、気持ちを切り替えたのか、表情を引き締めた男は真面目そうに見えた。

「話には聞いてたが、あんたは随分平気そうだな。特級冒険者が依頼でもないのに国を出るなんて異常事態だろ。依頼関係でアニエスに文句を言うヤツがこの国にいるわけねえ。てっきり痴話喧嘩でもしたのかと思ったが」

「俺とアニエスは別に恋人じゃない」

幼い頃からニコイチで過ごしたアニエスの腕は素晴らしく、他国にまで轟くほど。特級ともなると、その戦力や腕前から国が放したからない。余所の奴がスカウトなんざしようものなら、すわ戦争だ。

「でもあんたが一番アニエスに詳しいんだろ？」

「別にこの国がどうのって話じゃない。あいつは生涯連れ添う相手を探しに行っただけだ」

「は？」

「この国じゃ、もう名前が知られすぎて誰もあいつに添い遂げようとしな

んだよ。少なくとも名乗りを上げる根性がない」

そう。アニエスは強い。その力で自分の食い扶持を稼ぐどころか、腕っ節と名声でいろんな土地の治安向上に貢献している。そんな彼女を支えようとか、隣に立とうという気概のある男がいない。この男のように誤解して俺に突っかかってくる奴さえも最近じゃいなかった。だからこの国で探すのをやめたというだけのこと。

「あいつが気に入るような良い男を捕まえられたんなら、未開の地からでも帰ってくるさ。だからギルドが慌てる必要はない」

今頃のびのびと旅をしているだろう。俺に告げたのが二週間ほど前で、発つと言っていたのが三日前のことだ。ギルドの動きがずれたのは、アニエスが黙って発つたからだだろう。道中で手紙でも出したか、特級だけが所持できる通信機で伝えたか。

「あんたは？」

「あ？」

「アニエスが気に入った男はあんただろう」

「俺？ まあ、そうかもな」

自惚れでなく、アニエスも俺を好きだったと思う。……いや、少なくとも

隣に、側にいて居心地が良い奴だったと思ってくれてくれるはずだ。ハグは何度もしたし、彼女がそれを許した男は俺だけだった。

それでも、俺が欲情し、恋をするのは野郎なのだ。こんなに心苦しいことがあるか。俺だって、できるなら応えてやりたかったさ。でもアニエスはそんな気持ちを欲しがってない。彼女は同時に、俺が俺のまま——男に抱かれたいという欲求を叶えてくれる相手と幸せになることを願っている。

わざわざ口に出したりはしないが、俺達は互いの気持ちを酌み交わすようにして、幼馴染みを続けてきた。それは今も変わらない。

「あいつが選んだ野郎がクズだったら見る目ねえなって呆れるし、そいつのことはぶっ飛ばす。まあ、アニエスに限ってそいつはないだろうが」

「……わかんねえな」

「お前に分かれなくても困らん。さあ、お前の所のギルドマスターにはそう言えば分かるだろうから、もういいだろ」

「おい、入れてくれねえのかよ」

「なんで入れてもらえらと思った？　せめてその男前な見目を抑えてから改めてくれ。さあ帰った帰った」

しっしっ、と手を払うと、ぶすくれた顔をする。中々動こうとしない男に、

傘でも押しつけければ満足かと玄関を開けようと手を伸ばしかけた瞬間、

「悪かったよ」

言って、男は俺と目を合わせた。黒い目は意志が強そうで、真摯な色をたたえている。

「俺はハサンだ。ギルドの監察官として採用されている」

「……ああ、それでか。最初にそう言ってくれれば……いや、あんたの態度で来られたらどのみち一発殴ってたかな」

監察官はギルド職員ではあるが、普段冒険者と直接やりとりする機会は殆どない。あるとすればトラブルを起こしたり、犯罪に関わった際か、はたまたそれらの被害者になった時くらいで、誰が監察官なのか、殆どの冒険者は知らないだろう。

そして、男の名乗りを受けて俺もまた腑に落ちた。アニエスの出立に関する調査のために派遣されたのだ。——こんな態度で職務が遂行できるのかと思うが、多少手荒いことになっても大丈夫な程度には身体を動かせるようだし、荒事向けの男なのかもしれない。

「ギルドマスターにどう言われるか分からんが、少なくともあんたと何かあったわけじゃないらしいとは伝えておく。必要ならまた来るか、呼び出すこ

とになる」

「その時は人を変えるか、もうちょっと態度をなんとかしておいてくれ」

「ふん。後ろにアニエスがいるからって強気だな」

俺は屈しないぞ、とてんで的外れなことを言う男の肩に掌底を叩き込む。

「そういうところだっつってんだろ！」

「いってえ！」

勿論全力じゃないし、男も踏ん張って、咄嗟の事ながら吹き飛ばされるような惨めは晒さなかった。

「てめ、俺は監察官だぞ！」

「権威を笠に着てんのはそっちじゃねーか、このばか。俺は人として『まともな』奴を寄越せって言ってるんだよ。ギルドマスターに怒られてこい」

今一度しっしっしと手を動かすと、ハサンと名乗った男は「覚えてろよ！」と捨て台詞を吐きながら走っていった。賑やかなことだ。

「おうニール、朝から繁盛だな」

近所迷惑だよと思っていたら、案の定ここいらの職人を束ねるおやっさんが家の中から窓を開けて笑っていた。工房が軒を連ねるこの辺りの地区は、二階を居住スペースにしている家が殆どだ。街中の方とは違って家々の間隔

は広々としたものだが、家の外でやいやい騒いでいたら分かる。

俺はおやつさんに騒がせて悪いなと謝って、家の中に戻った。あの男を地面にたたき伏せた時に跳ねた泥が顔にまで飛んでいるのに気づいたのは、手を洗おうと水瓶を覗き込んでからのことだった。

まったく、時間を取らせるだけの男だった。……見た目は本当によかっただけに、残念極まりない。

ぐっと跳ねた心を無理矢理に押さえつけて、俺は朝飯の支度をすることにした。

雨が降り続き、昼を過ぎても止まない。

こういう日は鑑定作業を夜に回すことにしているが、家の裏手にある小さな温室が気になった。水量をコントロールしたいがために作ったスペースだが、土地が続いている以上影響は受ける。それに、こういう時は小動物がやってきて潜り込んだりすることもあるからあまり目を離したくない。

中で育てているのもヤム芋だったり、スクワッシュ瓜、キャロ根^ねなど、甘みが強い野菜が多い。買うと高いから、折角余っている家の敷地内で栽培している。アニエスが好きで、いつでも出してやれるという長らくの習慣も大

きかった。そのアニエスは暫く帰らないはずだから、それも俺だけで食わないと行けない。余剰分は保存食として加工すれば節約にもなるだろう。

俺は暗くなる前にと雨具を羽織って温室へ向かった。一日収穫が遅れただけで味が落ちるのが野菜という食べ物だ。天気や人間の都合は考えちゃくれない。育ちすぎても味が悪くなる。

温室に鍵はなく、動物対策だけしてある簡素な建物だ。小さな打掛錠をいくつかつけているから、人間であれば簡単に入ることができる。

「……………」

俺が温室に近づくと、足跡が一人分残っていて、中で人が倒れているのが見えた。さっと鍵を開けて中に入る。

畑を踏まないようにするためなのか、端の方で身体を横たえていたのは、変わった意匠の黒い服を着た少年だった。

「おい、大丈夫か？」

身体を揺らさないように肩を叩く。服はぐっしりと濡れていた。足跡が残っていたことからして雨が降っている最中に入り込んだはずだから、そう時間は経っていないはず。しかし少年の肌は冷え切っていて、反応も鈍い。寝ているだけなら直ぐに起きるはずだが、それもない。呼吸はあるが、身

体が小さく震えている。

服の濡れ具合からして、ここに来てからそう時間は経っていないはず。にも関わらずこんな冷たくなっているのは、元々体調が悪かったのかも知れない。何かから逃げてきた可能性も捨てきれず、俺は少年を抱き上げた。

家においている備蓄で、ある程度まかなえるはずだ。

男にしては軽く感じる身体に急かさされ、俺は再び家の中へ飛び込んだ。

取り急ぎ飲み水を瓶に入れて、風呂場へ連れ込む。浴槽に湯を入れながら、少年の身体を温めることにした。少年の靴と靴下だけ取り急ぎ脱がせ、自分の服は下着以外脱いで、一緒に浸かる。そこで少年がうつすらと目を開けているのが見えた。しっかりと目が合う。しかし声は出ないのかはくはくとして口が動くだけで、なんの音も出てこない。

意識があるならと少年の頭を支えて水を飲ませると、最初はきゅつと唇を引き結んだものの、ただの水だというのが分かったのかされるがまま飲んでくれた。

それでも、身体に力が入るわけではない。殆ど反射で飲んでいただけなのだろう。

「悪いな、助けるためだから許せよ」

湯が徐々に満たされていくとはいえ、服は邪魔だ。即座に乾かすような道具も持っていない。幸い、外傷はないようだし、泥汚れもほぼない。良い生地を割くわけにもいかないから脱がすことにした。上着や中のシャツはボタン掛けで複雑なことはない。上着と揃いのドレスパンツには繊細なファスナーが付いていたが、それも壊すことなく寛げられた。血が付いていたりすることもなく、ざつと見る限り身体が冷え切っているだけ。

力なく俺にされるがままの少年の身体は、傷もなく綺麗なものだった。それどころか、特に痩せ細っていることもない。肌艶はよく、どこか裕福な所の出なのではないかと思わせた。

いかにもトラブルに巻き込まれた風だが、可能性としては家出からの人攫い未遂……が無難なところか。ここらじゃ見かけない服だし、遠くの国から何らかの方法で飛んできた——アイテムや魔法の中には人や物を転送するものがある——のかもしれない。

水を飲んで、温かい湯でほっとしたのか、服を全部脱がした頃には少年はまた目を閉じていた。まあ、抵抗する力もないようだし、余程身体が辛いのだろう。

少年が大人しいのを良いことに彼の身体を清めた後、俺はできるだけふか

ふかな大判のタオルでくるんで、寝室がある二階へ上がった。自分のベッドへ寝かせ、タオルは水気を吸っているため回収する。

湯に浸かったことで大分マシにはなっただろうが、身体の奥が冷えていると自分の力で体温を保つのが難しくなる。体力もその分消耗するだろうと、俺も潜り込んで抱きしめることにした。流石に下着は新しいものに替えた。命がかかっているとは言え、少女だったら躊躇っていただろう。俺だって自分の命は惜しいし、金も権力もありそうな人間を敵に回したくない。そう言う意味では少年でよかったと言うべきか。

自分の体温が少年に移っていくのを感じながら、目を閉じる。どうせこの子の世話をすると決めた以上、今日このまま仕事ができるはずもない。

突発的な休日をこんなにゆったりと過ごすことも久しぶりで、俺は深く呼吸を繰り返しているうちに意識を眠りの中に浸していた。

意識が覚醒したのは、腕の中で、びく、と少年の身体が跳ねる感覚があったからだ。少年の身体が無事に温かくなっていることにほっとした。

驚かせないように、寝起きの人間のように分かりやすく「うーん」と伸びをする。それから少年の身体を労るように優しく頭を撫でつつ、ゆっくりと目を開いた。

「おはよ。体調はどうだ？ 楽になったか？ ……熱はなさそうだな」

「あ、え、えと、あの」

俺の腕の中で、少年がただただおろおろとする様を見つつ、粗野なところのなさそうな反応にやっぱり育ちが良いんだろうなと感じる。

「意識が朦朧としてたみたいだけど、俺ん家の温室ちの中で倒れてたところまでは覚えてるか？」

「あ、はい」

「身体がかなり冷えていてな。そのままじゃ危なそうだったから風呂に入れて、温めてたんだ」

「あっ、あれ夢じゃなかった……ん、ですね」

どうやら、俺が風呂に入れていたのは覚えていたらしい。少年は俺の腕の中でほっと息をついて、身体から力を抜いた。

「あの、助けてもらって、ありがとうございます」

「いえいえ」

「えと、でもオレ、金とか持つてなくて」

「金稼ぐのに人を拾うってのは、あんま旨味のねえやり方だなあ」

そこそこ警戒心はあるらしい。俺がどういう人間なのか探るような目に、

思わずくすくすと笑ってしまった。まあ、俺も抵抗されたとき怪我しないように、それなりに気は張っているが。

「俺はニール。この町の冒険者ギルドと契約してて、鑑定士をやってる。冒険者がギルドに持ち込んだダンジョン由来の品々の質とか、道具の用途を調べる仕事だ。他にも細々とやってるが、メインは鑑定士だな」

「かんでいし……」

よく分かかってない顔で少年が俺の言葉を繰り返す。そして

「オレ、尚吾しょうごです。えつと……どう説明すればいいか……」

「ショウゴね。取り敢えず今は名前が分かればいい。他のことは追々……つと、そうだな、取り敢えず飯にするか」

戸惑う少年の名前が分かればいい。この辺りじゃ聞き馴染みのない名前だから、やはりこの辺りの人間ではなさそうだ。

飯の提案に、ショウゴの腹がぐうと鳴る。

「ははっ、素直で結構。温かい料理にしようか。シチューとかなら食えるか？ 芋はすりおろすのもいい。肉は用意がないから無理だが、バターはたっぷりある」

腹が鳴って、食欲があるならば大丈夫だろう。目に見えてショウゴの顔が

輝き、喜色もさることながら、目に力が宿る。

「は、はい」

「よし。じゃあ準備を」

「待ってください、オレもなにか手伝います」

「そうか？ まだ無理はしなくて良い。じっとしているのが怖いなら、俺の服を貸そう。シヨウゴの服はまだ洗いもしてないからな」

言って、シヨウゴを抱いていた腕をそっと放す。掛け布団を退け、おずおずと自分の身体を動かすシヨウゴを横目に、俺は部屋着と、紐で調節できるフリーサイズの下着を棚から取り出しシヨウゴへ渡した。

「極端にデカいことはないだろうが、小さいよりはマシだと思って着てくれ」
「そんな、とんでもないです。なにからなにまで……ありがとうございます」
はにかんだシヨウゴの顔は幼く見えた。丁寧な物腰に、話をするこゝと自体は難しくなさそうだと思う。

俺も服を着て、一緒にダイニングへ向かった。今は男の一人暮らしだが、元々夫婦が住んでいたこの家は、突然人が一人増えても十分な広さがある。興味津々な様子を隠しもせず、シヨウゴがゆっくりと俺の後をついてくる。本当に、驚くほど素直な少年だ。擦れたところがない。見たところ十四歳く

らいだろうか。俺は……その頃には既に自分の性的指向を自覚していたから、丁度同性にはぎこちなくなっていた時期かな。

シヨウゴはよく動いた。火の扱い方は馴染みのものと異なるのか腰が引けていたが、包丁は危なげなく使えていたし、調味料や食材は説明すれば直ぐに覚えたようだった。自炊はできるらしい。

思ったより悪いことにはならないかもしれない。と思うのは、あまりにも悪い想定ばかりしたからだろうか。本人に敵意や悪意がなさそうなのが幸이었다。

飯を食った後のシヨウゴの顔色は大分良くなっていて、改めて風呂に入るかと勧めると、飯の話を出したときくらい顔を輝かせるから笑ってしまった。使い方を教えようとしたが、一緒に入って欲しいと言われて、少し考えた後ついでにシートとシヨウゴの服をもみ洗いしようとして提案した。

シヨウゴは多分、自分が一人になるか、俺を一人にするのを警戒している。飯の準備も、俺が鍋に入れるものを逐一確認していたのは毒や睡眠薬でも入れられやしないかと思つてのことだ。

小動物みたいだな、と思いつつ、好きなようにさせる。シヨウゴを家に運んだ時点で、どんな事情があるかが助けると決めている。勿論、できる範囲

でのことではあるが。

シーツやら服やらを踏み洗いしながら身体も洗う。妙に股間を凝視されると思っただら下生えを整えているのを見られていたのには参った。ほんの少し、一瞬だけそういうことになるかと思っただけ。……子ども相手にそう言う発想が出てくるなんて。欲求不満なのかもしれない。

夜中ショウゴが出て行く可能性も考えて、彼の服はある程度乾かしてやることにした。違和感がないようにシーツごと乾燥機に放り込み、ゆっくりと稼働させる。中々くると籠が回りながら、温風を出して乾かす道具で、いつだったかの誕生日にアニエスから贈られたものだ。俺は彼女の誕生日に雨除けの指輪を贈っている。身につけていれば雨に濡れない代物で、古代文明の遺物。身体が濡れることは大体の場合デメリットしかないし、彼女は既に毒除けの祝福効果があるピアスを持っていたからそうした。

と、俺の思い出はともかく。俺の家の中でも風呂の次に高価なそれを使って乾くのを待っていたが、ショウゴは乾燥機があることについて、何の反応も見せなかった。大体はこの手の道具を見ると、羽振りが良いのかと思うものだが。

当の本人はやはり疲れていたのだろう。眠そうに何度も目を瞬かせ、擦る

ものだから、むにやむにや言うのを押し切ってベッドへ寝かせることにした。

ちぐはぐな少年だ。……もしかしたら、長い間どこかで軟禁されていたか。

言葉に不自由なところはない。それどころか、教育された言葉遣いなのは間違いない。明日にはもう少しマシになっているだろうかと思いつつ、乾いたシヨウゴの服を畳んで、枕元に置いてやる。起こさないように静かに階段を降りてシーツを畳んでいると、玄関のノッカーが控えめに叩かれた。

今日はやたらと人が来る。内鍵と打掛錠を外してドアを開けると、柔らかな金髪の美丈夫がそこに立っていた。

「ジェイド？ どうしたんだ、こんな時間に……？」

ジェイドは騎士団に所属している騎士隊長だ。治安維持のための組織はいくつかあるが、騎士達は教育を受けた貴族階級の次男以下しか入ることが認められていない。要人の警護からモンスター討伐や犯罪者の取り締まりなど、業務は多岐にわたる。かくいう俺も、昔世話になったことがあった。

この家に住み始めて鑑定士として新しい生活を始めた直後は、アニエスとの関係絡みで新人冒険者とは名ばかりの荒くれ者に家を荒らされたことが何度かあった。犯人が分かるまでは騎士隊長の彼が見回りや調査を担当してくれて、冒険者だと分かってからはギルドの監察課と協力して解決してくれた。

以来、俺を経由してアニエスと手合わせしたりと親交がある……あ、アニエスのことか？

「もしかして、アニエスがそっちに手紙でも寄越したか？」

「ああ、いや。それも聞きたいことのうちだけれど、先に仕事絡みの話をさせて欲しい。この辺りに少年が逃げてこなかったかな」

「はあ……？」

ジェイドは女受けのいい、甘い顔立ちの青年だ。舐められることも多からうに、しかし現場の人間として、隊長としての人望は高く、人をまとめる力のある男だ。街中で見かけると大体女達はきゃあきゃあ言っているし、他の騎士の男達からもよく慕われているようで、楽しい様子を見ることがある。

そんな男も仕事中はきりっとしていて、俺が世話になったときもかなり真面目に、真摯に取り組んでもらった。本来であれば、そんな騎士に協力しない理由はないのだが。

「悪い、今日は雨だったろ。朝は多少外に出たが、それからは家にいたんだ」
ショウゴの事は、今は伏せよう。ジェイドへ協力したい気持ちはあるが、ショウゴの様子をもう少しみたい。落ち着いて、事情が分かった上でジェイドに言えるなら無論そうするし、ショウゴがここから黙っていなくなった場

合も、ジェイドには事情を説明するつもりだが……今ここで保護したと言つて、どういう風に転がるか予想が付かなさすぎる。

「そいつはなにをやらかしたんだ？ 場合によっちゃ締め上げとくが」

「それには及ばない。罪を犯したというわけではないんだ。ちよつと……保護を命じられていてね。この辺りは持ち家だったり、敷地が広いのもあつて今日は順番に搜索の許可を得つつローラー作戦をしているところなんだ」

「ああ、そういうことか。お疲れさん。昼も夜もねえ仕事は大変だ。俺んところなら好きに見てくれていい。少年ね……お偉方の愛玩用に、つてか？」

「すまない、言えないことが多くて君にはこれ以上は……けれど、そういう子ではないよ。どちらかという……これはたとえ話だが、酷い扱いを受けていた場所から逃げ出したというのが近いかな」

「ふーん？」

いまいちよく分からないな、という素振りで話を聞く。

「そういう事情があるなら、早いとこ見つけてやらねえとな。もし見たら保護しとくよ。一応聞いとくが、命令の大本おおもとにいる奴はまともなんだらうな？」

隊長であるジェイドが『命じられた』というんだから上の方から指示されたことなんだらう。となると、貴族か王族か。そこから少年が逃げ出すなん

て何が起こってるんだか。

ジェイドは言葉にこそしなかったが、俺の目を見ながら頷いた。……普段は穏やかな顔で愛想を振りまいているのに、仕事中は殆ど笑うことのないこの男のことは信用している。だったら、きつとジェイドに預けても大丈夫なのだろう。本人がまだ警戒しているし、起こすのも忍びないから黙っておく。「で？ 許可云々と保護の件は分かったが、アニエスの件でジェイドが聞きたいことってのは？」

話を変えると、ジェイドは表情を崩した。なんというか……こう、戸惑ったように。

「彼女の件なのだが……君の言うとおり、手紙が届いたんだ。国を出ると言うことと、その、君に関することが」

「俺？」

ギルドの……というか、今朝やってきたハサンという男と流れが殆ど同じだ。アニエスの奴、手紙になんて書いたんだ？

ジェイドは何故か頬を赤らめていた、家の中にある照明に照らされた顔は、薄暗い中でも綺麗なものだ。

「君には……言ってなかったね。私とアニエスの間では話が付いていたのだ

けど……。その、ニール。私は君の事が好きだ。君さえよければ、特別な関係になりたいと思ってる」

「……は？」

「アニエスとは何度も手合わせをしていてね。もしその中で一度でもアニエスが『よし』と言ってくれたなら、君を口説いてもいいと……。そういう話だったのだけど……。彼女はいなくなってしまった」

話について行けてない。

そう言いたいのが、初めて向けられる控えめな好意に、俺は面食らっていた。見惚れていたと言ってもいい。

「手紙には、『ニールに近づくからには紳士たれ』と。君に好意を伝えて、振り向いてもらうために口説いてもよいと書かれていた」

「……本当にそんなことを、アニエスが？」

少し考えてみたが、俺に近づく男をアニエスが選別するような真似をするだろうかと疑問が浮かぶ。勿論俺だってアニエスに近づく男が碌なものじゃなければぶっ飛ばして二度と近づこうと思わないようにしてやる気概でいるが、実際にしたことは数えるほどしかない。

いや、俺もしてるな。してたわ。

しかしアニエスのことを舐め腐った男だったので仕方ない。少なくとも、ジェイドのように真つ直ぐに伝えてくる好青年をふるいにかけてたことはない。「なんというか、元々は君に一番近い彼女に相談というか、私が君に惹かれていたことを伝えたことに端を発しているんだ。アニエスは私のみだりに近づいて君につきまといっているのを見たら、意地悪く邪魔をするかも知れないから私を認めさせてくれと」

「ああ、そういう」

納得するには少し足りないが、理屈は分かる。俺もジェイドのような男がアニエスの周りをうろつき始めたら探りを入れるし、俺を認めさせろと言うだろう。

俺が頷いたのを見て、ジェイドはほつと表情を緩めた。柔らかな微笑はジェイドの顔によく似合っている。……愛想も良く人当たりも良い。街中で騎士に熱を上げる女達の会話に名前がよく上るのも耳にする。

だから以前、ジェイドが真剣に俺を心配してくれたたり、気にかけてくれるのを勘違いするなど言い聞かせた。まさか、こうなるとは思ってなかった。「ニール。私は……アニエスと君の間にある深い愛情を垣間見て、彼女に嫉妬したんだ。勿論、彼女と同じ場所に立てるとは思っていない。しかし、君

の心の幾ばくかに、私を置いてもらえないだろうか。そうでなくても、私が君に……肉欲を伴う好意を持つてゐることを、知っていて欲しい」

急に潜められた声に、胸が跳ねる。綺麗な言葉ばかり聞いていたせいでふわわとした気分だったが、ジェイドの感情が……性的な欲求を伴うものなのだと言に出されて、急にピンと合うような心地に俺は狼狽した。

「そ、それ、って」

「君の恋人になりたい。君を独占して、共にいたい。そういう感情だ」

ジェイドの好意が急に生々しい感覚を伴う。肌と肌が重なるような、艶めかしいものに。

かっ顔が赤くなつたのがジェイドにも分かつたのだろう。柔らかく細められた目と、下がった目尻に、余計に羞恥心が追いかけてきた。

「その反応は、期待しても良いのかな？」

心なしか柔らかな声さえも艶めいて聞こえ、俺はひゅつと息を飲んだ。

「きゅっ、急すぎる……し、その、あんたは沢山の人から好かれてるだろ。それこそ女も男もいる。なんで俺を……」

「恋心はえり好みして育てるものじゃないよ、ニール。君は恋をしたことはない？」

ある。あるが、端から実らない気持ちで育てるような余裕は俺にはなかった。相手が男と言うだけでそうだったのだから、実質ないのかもしれない。だが、確かにジェイドの言う通りだ。俺だって、選んでそうできるならアニエスだけを思っていたはずだ。

「気持ち……わかった、が」

「勿論、返事は今すぐじゃなくていい。いや、今じゃない方がいいかな。私と……恋仲になることについて、どんなものか考えて欲しい。その間、君を口説かせてくれるならば尚いい。アニエスからの手紙を読んで、たまらなくなつてこんな時間に来てしまったんだ。済まない。すぐに伝えたくて」

矢継ぎ早に繰り出される言葉を受け入れ、俺は一つ頷きを返した。正直、既にいっぱいいっぱいだ。

ジェイドが、俺が好き？

いつだったか、ジェイドは身なりの良いご婦人の手の甲にキスをしていた。一回や二回じゃない。相手も全て違う。そしてジェイド以外の騎士がしているところは見たことがなかった。まさか隊長職だからするわけでもあるまい。だから俺は、ジェイドは女が好きなのだと思っていた。

そういえば、あんなにジェイドを熱心に見つめる女達の口から、ジェイド

が結婚しているだとか、恋人や許嫁がいるだとか、そう言った話を聞くことはなかったな。

「悪いジェイド、急な話で俺、これ以上は……ちゃんと話が聞けそうにない」

そんな男の心を急にぶつけられて、俺にとつては不意打ちも良い所だ。

俺のどこがそんなに気に入ったのかとか、聞きたいことは山とある。

だが、ジェイドの雰囲気に入られたのかとか、聞きたいことは山とある。俺は話を終わらせてしまいたかった。

「構わない。私こそ突然すまない……でもどうか、私をもっと意識して。良い返事がもらえるように努力する」

すい、とジェイドの顔が近づき、咄嗟に掌で彼の口元を覆う。俺をなめてかかり、圧をかけてやろうと冒険者の男に同じようなことをされた時は、しようもないことを、と煩わしさしか感じなかったのに。どきどきして、この距離を過剰に意識していた。

ジェイドが目を丸くしている。しかしそれも直ぐになくなり、優しく手を掴まれた、と思つたら

「ひえっ」

——ぺろりと掌を舐められ、その後ちゅ、と口づけられた。熱い舌の感触

に怯んで、直後やってきた痺れるような甘い感覚が身体中を駆け抜けていく。「かわいいね……でも、私もこれ以上君を前にしていると我慢ができそうにない。今日は帰ろう」

「やっ、ジェイド、……っ、そのまま、喋るな……っ」

俺の掌に声をぶつけるようにして放すジェイドに、咄嗟に手を引こうとしたものの力が弱すぎたのかびくともしなかった。

「名残惜しいけれど……おやすみ、ニール。よい夢を」

俺が必死になってジェイドの手を振り払うより先に、ジェイドは優しく俺を放して、玄関の戸を閉めた。

どっどっ、と一層強く、早鐘を打つ心臓に、どうにか鍵をかけてその場を離れる。ジェイドの唇の感触も冷めやらぬ中、いたずらに身体に火を灯された俺は——風呂場に駆け込んで、思わずキスされた方の手で抜いた。なんなら、乳首を弄りながら尻の穴に指まで入れて、そっちでもいった。

突然口説かれて、あんなにアプローチされたことなんかないんだから仕方ないだろ?!

誰にともなく反論しながら、声を殺して耽った自慰はそれはもう気持ちよかった。

やたら男と絡むこととなった日から一夜明け、二夜が明けた頃、シヨウゴは恐る恐る自分の身の上を語り出した。朝食を片付けて、食後のコーヒーを楽しんでいた時のことだった。

「実は……オレ、違う世界から召喚されたんです」

そんな突拍子のない言葉を皮切りに、今では廃れてしまった召喚術によって、チキユウという世界から来たこと、魔法もモンスターもダンジョンもなく、それどころか戦争さえ身近でない平和な国に生まれ、親元で勉強に励む学生であったこと、こちらに召喚されてからは術者からは狙い通りのものが現れなかったことで疎まれ、不安で仕方がなかったこと、身の危険を感じ、従順に振る舞いつつも抜け出す心づもりでずっと張り詰めていたこと、逃げ出した後はまさに右も左も分からず、比較的穏やかな空気の流れるこの地区まで来たときには体力も限界で、その上雨も降ってきたため温室の中で雨風を凌ごうとしていたことをポツポツと語った。馬小屋も考えたが、何せ生き物であるし、いななき等で人に気づかれるのが怖かったようだ。

シヨウゴの口から語られた話は、ジェイドから耳にした内容と一致する。

変わった服装、丁寧な言葉遣い。二日経って、ようやく少しずつ解れてきたように思えてきた俺への警戒心。

なるほどなるほど。と、俺は合点がいった。こう見えて、悪いことを考えている人間の気配には聡いつもりだ。

シヨウゴを連れて簡単な鑑定作業をしたりもしたが、手癖足癖も悪くなかった。善良な少年とみていいだろう、と直感的にもそう思う。

俺がシヨウゴの言葉を信じる、というと、シヨウゴは途端に狼狽えた。

「ほ、本当に信じてくれるんですか？ 嘘はついてませんけど、自分でも信じられないくらいなのに」

「まあ、どのみちお前がここにいて、今のところここで生きていかなきゃならんのは変わらねえしなあ」

「……それは……そうです」

「それに元々お前を拾ったとき、できる限りのことはするつもりだったから、俺としてはお前が誰だろうが面倒を見るって言うのは変わらないぞ」

「え？」

シヨウゴの驚いた顔に、自分でも裏がないことが驚きだなと苦笑が漏れる。俺がシヨウゴだったら絶対に信用してない。

「運の良さも実力のうちって言うしな。シヨウゴ、お前これからどうしたい？」
「どう、とは」

「騎士団がお前を保護しようとして連日搜索してる。人相書きはまだだが、そのうち出るだろう。そうしたら外を出歩くのは難しくなる。だが、俺はこれでも腕の良い鑑定士なんぞな。稼ぎは良い。贅沢をしないならお前一人を家に閉じ込めて食わせるくらいのことではできる。ただ、お前はその間家の中で、窓から見える範囲さえ怯えて暮らすことになる」

俺の言葉に、シヨウゴの顔が強張る。

「そこでだ。俺には一人幼馴染みがいるんだが、今は個人的な事情で国を出てるんだ。そいつのところへ行けば、ひとまずお前が辛い目に遭った場所からはさらに遠ざかることができる」

「……でも、どちらにしてもニールさんに迷惑がかかるでしょう？ それは……嫌、です」

まあ、シヨウゴを国外に逃がして、しかもまずアニエスを頼れと言ったら、騎士団はともかくギルドの監察課は黙ってないだろうな。騎士団とギルドはそれなりに連携が取れているから、保護対象だと言われている人間を遠くへやってしまえば締め上げに来るだろう。

「なら、素直に騎士団に保護されに行くのがいい。俺も世話になった人がいるが、その人は信用できる」

ショウゴの顔には躊躇いや迷い、不安が滲む。俺はもう少し言葉を続けることにした。

「出歩くのが不安なら、さっき言った人をこっちに連れてこよう。地下室の作業場はお前も入ったとおり貴重品でいっぱい、この家の中じゃ一番貴重な鍵も付いてる場所だ。そこで留守番してくれればいい。ただ、鍵をかければ中からは出られない」

つまり、俺のいない間や、俺に何かあった際に一人逃げることもできない。「……少し、考えても良いですか。オレも、いつまでもニールさんにおんぶに抱っこじゃだめだって、頭で分かってはいる……つもり、なので。ここでお世話になりたい、けど……家に籠もったままじゃ、前と変わらないから」「もちろん」

笑顔を乗せて頷くと、ショウゴは少しだけ表情を和らげた。

さて、そうするとショウゴにできるのは家事になるわけだが——既にこの二日ほどで俺の家の間取りや俺のやり方を把握しているショウゴにはなんの造作もないことだった。なんなら俺より丁寧だ。俺が地下室で鑑定作業を進

めている間、ショウゴは気を紛らわせるかのように一心不乱に家の中を磨いてくれた。その後ぐったりとしていたから、流石に休ませたが。

そして更に三日が経つ頃には、ショウゴの体調も纏う雰囲気も、大分良くなっていた。

「えと、ニールさん。オレ、騎士団に行こうかと思って……」

倒れていた日から六日後の朝。幾分か活力が見える目に、まあきつとそう言うだろうなと思っていた俺は、不意に裏口の戸を叩かれる音に咄嗟に身構えてしまった。

びく、と身体を跳ねさせたショウゴに、風呂場にでも隠れていると囁き、裏口を開ける。

「突然申し訳ありません、ニールさま。わたくし、神殿所属の神官、セーゲルと申します」

淡い緑の髪色の男が、正式な神官のみが着用を許されるローブを羽織り、そこに立っていた。

「面識はなかったと思うが」

「は。その通りでございます。不躰ですが、今日は聖女さまをお迎えに上がりました」

声を潜め、男は言う。俺は思わず眉をひそめた。

「せいじょ？」

「異界より来たりし世界の落とし子。……あまりこういった表現は好みませ
んが、『外れの御子』と言えば伝わるでしょうか」

「いや、全く分からんな」

敬虔でない俺は神殿の事情や聖書に記された文言に疎い。

あっさりとした俺の態度をどう取ったのか、セーゲルと名乗った神官も少
しばかり眉をひそめた。怜悯な顔立ちはそれだけで寒々しく、相手を威圧で
きるだろう。俺にはさほど意味はないが。

「すまない。あんたが神官だっことは見てわかるし、疑ってもない。ただ
俺は信心深くないし、あんたにとっての常識を、多分知らないんだ。立ち話
でなんだが、もう少し丁寧に教えてもらっても良いか」

「……では、聖女の別称である『慈愛の妻』なども存じ上げない、と？」
「すまん」

重ね重ね謝ると、セーゲルは少し考えるように自分の人差し指を口元に当
てた。多分荒事にはならないはず。

「わたくしは……異世界より召喚された方をお迎えに上がったのです。聖女

というのは立場を指す言葉で、仮にそれが壮年の男性であろうとも、人でないかろうとも、わたくしたちはそう呼称するのです」

「なるほど」

「彼、あるいは彼女らは意図しない召喚によってこの世界に呼ばれます。世界を渡る際に召喚術によって様々な能力を与えられる『勇者』や、それに準ずる召喚対象とは別で、『聖女』というのは大抵の場合、術者の意図しない者を指します。そして聖女さまは、希有な能力をお持ちであることが殆どなのです」

「はあ。そういうえば聞いたことがある。神殿がどこからか見つけ出してきて、全力で担ぐ女の話。音の響きから全て女だと思っていたが、どうやら違うらしい。」

「昔勇者召喚に巻き込まれてしまった『外れの御子』であった聖女さま達は、罪人かのような扱いだったと聞き及んでおります。時に飼い殺しにされ、あるいは放逐され……その境遇を憐れみ、命に貴賤なしと保護を申し出たのが神殿でした。聖女さまは神殿にて自らの御力に気づかれることが多く、時として不便でさえあるそれらを、祈りを捧げることで天に返すことも過去に例がございます」

「で、俺のところにその聖女がいると」

「はい。わたくし、特別な瞳を持っておりますゆえ」

隠し立てはできないらしい。とはいえ、はいそうですかとシヨウゴを渡すわけにも行かない。

「騎士団もその聖女を探しているらしいと聞いたが」

「はい。猊下が聖女さまがいらしたと知ったとき、既に聖女さまは御身をどこかへと隠されてしまっておりましてので、速やかに手配を致しました」

「聖女はすっかり怯えてるよ。まともな扱いをされてなかったらしい。神殿はそうじゃないと信じたいが、初対面の男よりは騎士団に預けたいかな。そっちなら顔なじみもいるし」

「今頃、命を取り下げるよう指示が下っているかと」

「現場の間まで届くのはそんなに早いのか？ それに、どこへ預けるにせよ俺が連れて行く。誰かに任せることはできない」

「神殿が信用ならないと？」

「俺はそんなに学がないんでね。推測だけで相手が信用できるのかどうか即決するなんて器用な真似はできねえんだ」

殆ど売り言葉に買い言葉のようなテンポで話が進んでいく。これでもアニ

エスと共に冒険者をやった自負があるし、シヨウゴを最寄りの詰所に逃がすくらいはできそうな気がする。ただ、セーゲルの言葉に嘘がないなら、俺がどういふ人間なのか見透かすくらいもできていそうだ。

結果として、セーゲルは俺の挑発に乗らなかつた。

「ニールさん、もういいです」

……シヨウゴがひよつこりと顔を見せたからだ。

振り返ると、シヨウゴは俺を案じるように、セーゲルと俺とを交互に見つめていた。そして俺の所までやってくると、行く手を阻むように出していた俺の腕を力強く押しつけた。セーゲルを見遣る目線は騎士団へ行くと言いかけていた時よりも強く、毅然としていた。

「あの、この人はオレを保護してくれたんです。迷惑になるようなことはないでください」

「おいシヨウゴ、」

「勿論です」

俺の言葉を遮って、セーゲルが同じくシヨウゴの目を見つめながら、かしまった表情で頷く。おい、俺も会話に混ぜろ。現状シヨウゴは俺の庇護下なんだぞ。保護者の意見も聞けよ。

内心を見透かすように、ショウゴは俺へ視線を移し、大丈夫だとも言い
たげに俺の手を握った。俺の意志を無視して握手をするな。

「ニールさん、オレ、王族？ に召喚されたんだ。でも、失敗って言われて
肩身狭くて。最低限だったけど衣食住は確保されていたから、余計に何もで
きなくて辛くて。この偉い人たちがどんなか分からないし、もしかしたら
気分で殺されるかもって思ってた、そういう話をしている人たちの声を聞
いてしまつて、結局怖くて逃げてきて、でも、ニールさんみたいな人がいる
って分かつて良かった。今の話、後ろで聞いてたよ。オレ、この人と行く。
えっと、セーゲルさん？ ニールさんが心配するから、そこだけ安心できる
何かってありますか？ オレはそれで、神殿つてところで過ごせばいいん
ですよ。」

「おいおいおいおい、ショウゴ、そりゃあねえだろう」

まくし立てるような言葉に、俺はショウゴの手を握り返した。聞いてりゃ、
完全に虐待案件だろうが。いくら異世界から呼び出したとはいえ、意思疎通
できる人型の生き物、それも子どもに対する扱いじゃないだろう。

少し声を張り上げ、圧を強める。ショウゴは初めてびくりと俺に対して怯
えを見せた。

「あ、も、勿論シヨウゴさんへのお礼は絶対につ」

「そうじゃねえって。……お前な、この世界に来て間もないんだろ？ だつたら言葉が通じて動けるってだけで赤ん坊と変わらねえ。ガキは親の手伝いをして仕事を覚えんだよ。そんで、親が食わせてやるのが普通だ。元々居た所でもお前は親元にいたって話だつただろ」

シヨウゴの顔に躊躇いが生まれる。そうそう、それでいい。身の振り方を決めるのなんていくら迷っててもいいんだ。それができる環境ならそうやって悩みに悩めばいい。

昔、自分がそうだったように、こいつにもそういう場所を作ってやりたい。そう思って、それが上手く伝わるかは分からなかったが、シヨウゴはセーゲルをちらちらと見ていたが、覚悟を決めたように俺を見返して、ぎゅっと手に力を込めた。

「お、」

「やっぱりオレ、神殿に行きます」

結果的に焚き付けた形になったらいい。いや、だからそういうつもりじゃないんだが？

「神殿じゃ、なにかしらの能力が分かるらしいじゃないですか。もしかした

らニールさんにお世話になった分のお礼ができるかもしれないし。そうじゃなくても、色々と勉強させてもらえる。結局騎士団に行つたとしても神殿に行くことになるなら同じことです。……元の場所に戻されたりとかは……ないですよ？」

なおも言い募りながら、シヨウゴの目線がセーゲルへ移る。眼差しを受けて、神官は真摯に首肯した。

「はい。神殿は俗世のあらゆるものから独立しています。そうでなかった時代もございましたが、今代の猊下はきつと聖女さまの御心が健やかであることを望むでしょう」

シヨウゴはその言葉を聞いて、安心したように頬を緩めた。セーゲルの表情も、いつのまにか彼を安心させるような柔らかなものになっている。

うーん。まあ、神殿に疎い俺でさえ、猊下の悪い話なんぞ一切聞かないが。

「それにオレ、もう十八歳なんで。流石にニールさんみたいな若い男の人にこんなデカイガキがいたら、いつまでも独身のままでしょ」

「は？ 十八？ 俺と大してかわらねえじゃねえか！」

「そうです！ だからガキ扱いしないでください！」

童顔過ぎるだろ。と喉元まで出かかった言葉を飲み込む。

「いや、俺のことは良いんだよ！ ……まあ、なんだ。神殿でも嫌な目に遭ったらいつでも抜け出して来い」

「はいっ！ また一緒に寝てください」

「それは狭すぎ…ああ、そんな顔すんな。分かった分かった」

今まで見たどの顔よりも明るく笑うものだから、俺はもう諦めた。しれっと同衾をねだられたが、完全に子どものもので俺も笑ってしまう。まさか『そう言う』意味じゃないだろう。

「神殿で自分にできることを見つけたら、またここに帰ってきます」

セーゲルに神殿のローブを被せられ、連れられて行く直前、まるで内緒話でもするかのように囁かれる。

「…いつでもいいって言ったろ。見つからなくてもいいぞ、別に」

「へへ、はい」

そして子どものように手を振りながら歩いて行くシヨウゴを見送りながら、俺はジェイドへ連絡を入れないとなとぼんやり考えながら、十八歳だと言ったシヨウゴの声を頭の中で繰り返していた。

…そう言う意味じゃ、ない、よな？

ショウゴの件を伝えるにジェイドへ連絡を取ったところ、既に保護の件は撤回されていた。ちゃんと保護されて、今は神殿に居ると言うことまで向こうから明かされたため、ならば伝えなくてもいいかと思っていると、お互いが休みの日に手合わせをと頼まれて、お手柔らかにと応じることにした。

強制されたわけでもなく、圧力があつたわけでもない。アニエスともそうしていたというジェイドの言葉に従って、騎士団の稽古場で木刀を振り回して打ち合った。流石にアニエスの代わりになれるとは思わないが、戦うジェイドの姿を見ることもなかつたので新鮮だつたのは確かだ。

強い男は好きだ。ジェイドは普段物腰が柔らかいから、ギャップもあつて少しドキツとするものがあつた。まあ、直ぐにそんな余裕はなくなつたが。

ジェイドの攻撃の重みに汗が肌を伝い落ちる。服がしつとりと濡れた頃、今日はここまですり切り上げた。後はシャワーを借りられる手筈になっている。アニエスは女騎士にも人気があり、ジェイドとの打ち合いの後は女騎士達の手合わせにも参加していたという。そのため、事が終われば女用の風呂場で汗を流すのが常だつたそうだ。

俺はといえば、当然男だから、ジェイドと同じ場所で汗を流すことになる。脱衣所で服を脱いでいたときはジェイドの鍛えられた身体にまごついたが、温水が出てくるシャワーを頭から被ればそんな緊張は吹き飛んだ。

——はずだった。

「んっ……あ、っ♡」

身体を清めるはずのその場所で、俺はジェイドの不埒な手に身体を震わせていた。展開が早すぎると思ったものの、アニエスが結婚相手を探しに出たように、俺も降って湧いたような申し出に乗らなければ一生独り身のままだ。

シヨウゴの発言に煽られたわけではないと言いたいが、今までのように恋や恋人というものを遠いものとして見つめているだけでは、多分今までと変わらない。ジェイドの申し出は渡りに船だった。

まあ、だからといってこんなにも早くそう言う触れ合いになるとは思わなかったが。

シャワーブースは人一人が入って身体を洗う分には広々としているが、流石に成人男性が二人も入ればそれなりに狭く感じる。騎士団所有の設備であるから、いくつもブースは用意されているにも拘わらず、ジェイドは俺と同じブースに音もなく入り込んで、緊張から解放されてオアシスを味わっている。

た俺の背後を取った。そしてあつと言う間に抱きすくめて、俺の身体に手を這わせてきたのだ。

「ああ……良い声だ。乳首だけでそんな可愛い声を出して……今までそんな素振りなんてなかったのに、なんていやらしい身体なんだろう」

「んああっ♡」

きゅ、と両乳首をつままれて、ジェイドの腕の中で腰がびくんと跳ねた。俺の腕は抵抗らしい抵抗もできないまま、ジェイドの太ももに手を這わせるようにして強張っている。腋を締めていないと腰が砕けてしまいそうだ。

そうでなくとも尻に当てられているジェイドの熱いものに意識が奪われているというのに。

「ニール、見て。まだ触っていないのに君のここ、勃たってきたよ」

「あん……っ♡ そりゃ、こんな風にされたら、誰でもっ、ああっ♡♡」

両方ともぷっくりと硬くなりはじめた乳首を指で弾かれて、俺は背をしなさせた。ジェイドの指摘通り、俺の興奮に素直に反応している下腹部には熱が溜まり始め、むくむくと欲望をため込んで膨らんでいる。

「君ほどの腕なら、私のささやかな悪戯など簡単に避けられただろう？ そうしないですごうしているのは……期待していたのかな？」

「やっ、……ち、が……」

何も違わない。その通りだ。

多少動揺があったとはいえ、俺は自分の欲求が向く対象が多数派ではないことを理解している。無論ジェイドに俺を害そうという気持ちがないというのは大きい、それでも真つ当に誰かと付き合いたい俺からすれば、不埒で軽薄な接触到に厳しくなるのは自然なことだ。

だから、いくらジェイドが俺を口説いて恋人になりたいと希望していても、俺がそれに付き合う義理はないわけで。だったら、俺が身体を委ねている理由なんて、そうされたかったから以外にない。折角正面から宣言してきた男なのだ。俺だってジェイドを知りたいと思うのは当然のこと。

ジェイドだってそれを分かっているはずだ。

手合わせしたところなんだぞ？ 相手の力量からして、どう動くのか、動かないのは何故なのか、わからないわけがない。

しかし、建前というものは大切だ。

「ちがう？ 私に乳首を弄られて、抵抗もせずには腰を揺らしているのに？」
ジェイドの声にからかいの色が混じる。意地悪く囁くその音が鼓膜を攪り、俺の腰を動かした。自分からジェイドの熱に尻を押しつけるような動きに、

殆ど無意識に首を横に振る。ジェイドはそれを許さないとばかりに、俺の耳を唇で挟み、甘噛みをして、れろりと舐めあげた。

「~~~~っ♡」

乳首はその間にもつままれ、優しく指先で扱かれて、俺の身体に着実に快感を溜めていく。

にもかかわらず、俺の立派に背伸びしたそこには手をつけず、ジェイドは丁寧な俺の身体をまさぐり続けた。

乳首は勿論、腹筋のくぼみに沿って指を這わせて、思わせぶりに、期待を持たせるようにヘソ下を撫で回したり。一方で俺の尻を揉みしだいて、自分の怒張を擦りつけながら俺を翻弄した。

「分かるかい？ ニール。君のいやらしいところが私を誘ってる。ほら……こうやって擦り付けると……ん、下の口が物欲しそうに私に吸い付いてくる」
「あっ、ああっ……♡」

男に突かれ、よがる自分を想像しながら一人で弄ったのは何も前だけではない。既に淫らな場所が変わっているそこに太い昂ぶりを擦り付けられ、俺は咄嗟にジェイドの手を掴んだ。

「だめ、だっ……そこは、まだ」

身体も心も、ジェイドのそそり立つ猛りを欲しがっている。しかし、それをまだ受け入れるわけにはいかなかった。

「約束、したから……」

「約束？」

ジェイドが俺の耳元で色っぽく繰り返す。こくこくと頷くと、ジェイドは俺を安心させるように囁いた。

「分かったよ。大丈夫、私も無理強いはしたくない……気持ちよくなるろう？」

「はぁあんっ♡♡」

首筋を舐めあげられ、甘く吸い付かれる。ちゅ、と近い位置で音を立てられ、俺は掴んでいたジェイドの手を、更に強く握ってしまった。

「あ、わり、い」

「かまわない」

ぎこちなく手を放すと、ジェイドに優しく抱き留められる。少しだけ身を任せると、どれだけ自分の身体が強張っていたのか分かった。

「怖がらせた？ ごめんね」

「いや……大丈夫だ、俺こそ悪い、萎えただろ」

「まさか。ねえ、こつちを向いて？ キスがしたい」

身体を撫でる手つきに性感を煽るような気配はなく、宥めるような動きへ変わっていた。僅かな申し訳なさにジェイドへ向き直ると、いつになく表情を緩めているのが目に入った。

「ふふ、かわいい。大事な約束なんだね」

「……ああ」

気を悪くした様子もなく、ジェイドはゆっくりと俺に顔を近づけ、唇へ吸い付いた。たつぷりと時間をかけて、何度もちゅ、ちゅ、と楽しむように味わわれる。

慈しむような触れ方だ。それを心地よく感じながら、そつと目を閉じる。自分の身体を大事にするように、と昔言われた。軽率に身体を開くな。お前の身体はそんなに安くない、と。

お陰でふしだらに遊ぶこともなく、またそんな気も起きずに今に至るわけだが……。お守りのように、時に呪縛のように俺の中にあるその約束は健在で、いくら率直に好意を伝えてくれていくジェイドであっても、直ぐに応じる気にはなれなかった。大体、面識があったとは言え、こういうことを含めて考えて欲しいと言われたばかりで直ぐに最後まで応じるのは、なんだか俺が尻軽みたいに見えそうじゃないか？

「ん、ちゅ……ふ、あ……♡ ん、ジェイド、触って……」

キスが続くにつれ、ジェイドの手が俺の乳首へ戻ってくる。乳輪を捏ね、敏感な乳首をくにくにと優しく刺激されると、もどかしくてたまらない。

ねだるように腰を揺らすも、ジェイドはただでさえ甘い顔立ちを更に蕩けさせて微笑んだ。

「だめ。たっぷり可愛がらせて欲しいし、あわよくば……こっただけで気持ちよくなっていくところも見たい」

「そんな、な……♡」

「はい、腕はこっち」

ジェイドの手に導かれ、彼の首に腕を回す。そのせいで、せっかく脇を締めて堪えていたのに、一気に耐えがたい感覚に膝ががくがくと震え始めた。

「んあ、あ♡♡♡ だめ♡♡ だめだって、それ、あう♡♡」

「ん、可愛い声……」

俺がぎゅゅと腕に力を入れると、ジェイドが嬉しそうに乳首を弄る指先を早めた。

「ああん♡♡」

縋るようにして、胸を貫く快感をやり過ごす。ジェイドの肩口に顔を埋め

るも、そうすると耳元で囁かれるジェイドの声と快感に逆に集中してしまつて、全然気が散らない。腰がへこへここと動き、ジェイドのものと擦れないか期待して止められない。

「はあ、んっ♡ イっ……く、いくっ、ジェイドっ、あ、——~~~~っ!!」

乳首を指先で弾かれて、腰がびくびく跳ねた。何度もそこで強い快感が炸裂し、張り詰めた先端から白濁が放たれていくのを感じる。

俺は立っているのも難しく、ゆっくりと腕の力を緩めてその場にへたり込んだ。じんじんとした快感がまだ乳首に残っている。その余韻と、目の前にぶるんと反り立つジェイドの昂ぶりを前にして、身体の奥が重く疼いた。

「う……♡」

達したにもかかわらず、淫らな気分が俺の腰から這い上がってくる。自然と顔を寄せて、ジェイドのそこに唇を寄せていた。

心臓が、まるで命の危機を感じるように強く、俺の身体を内側から叩いている。自分が酷く興奮しているのを自覚せざるを得ない。精を吐き出したのに、一人でする時のような気だるい感覚よりも、男が欲しくて仕方がないような衝動が未だに燻っている。

手を添えてジェイドの屹立に頬ずりをしながら、このまま触れても良いの

かと彼の顔を見上げた。

「ニール、かわいい……私に奉仕をしてくれるのかい？」

ジェイドの口角は上がり、一見すると微笑んだ優しげな表情に見えるのに、視線はぎらぎらと強く鋭く俺を射貫いていた。熱い掌が俺の頭を撫でる。指先が頬を撫るように触れ、俺はジェイドの先端を口に含んだ。

「んっ……」

色っぽい彼の声に、腰を撫で回されるような快感が走る。

奉仕なんて健気なものじゃない。そもそも男のものを口に入れるなんて初めてだ。いや、こっちの対人経験自体がそもそも初めてなのだから、手管もなにもない。

でも、俺に向けられたジェイドの情欲に、これは俺のために用意されたのだと感じてしまった。俺が触れてもいいものだ。だから躊躇など消し飛んでしまつて、欲望のまま勃起したジェイドの衝動を舐めしゃぶりたくなつた。太く逞しい根元を手で支えながら頭を動かす。吸い上げながらも歯を立てないように気をつけると、断続的に唇の隙間から空気が入った。ぢゅぷ、ちゅぷと音が鳴り、その振動にジェイドがうつつりとため息をつく。

「ああ……っ♡」

うっとりとした声に応えたくて必死で頭を動かし、唇で彼の怒張を扱く。ぴくぴくと跳ねる彼の先端が俺の上顎を擦り、嘔吐ええずかかないように気をつけた。

「ニール、無理しないで……そんなに激しくしたら疲れるだろう」

ジェイドの手が俺の頭を優しく撫でる。それが心地よくてジェイドのものを口から放し、彼を見遣った。

「悪い、……下手で」

「そんなこと。私のものを必死で啜える顔、すごくかわいいよ」

面と向かって言われると気恥ずかしい。興奮を煽るために言われているのかと思っていたが、どうも本気で俺をかわいいと思っっているようだ。

「それに、慣れていない君が積極的に動こうとしてくれたことが嬉しい。もつとしてくれるかい？ 私を見上げながら君が舐めてくれたら、すぐにいつてしまおうだろうけど」

乞われるまま、下からジェイドを見上げながら、彼のいきり立つ雄へ舌を這わせる。彼の纏う空気が柔らかなものから不穏なものへ変わるまでに、一呼吸もかからなかった。どうやら、口にした言葉は嘘ではないらしい。

浮き上がった血管を辿り、裏筋を舌尖でちろちろと舐める。鼻先が先端に擦れ、俺の方が興奮してしまふ。

ジェイドの両手が俺の頭を優しく掴んで、緩やかにその腰が揺れ始める。しかし口の中に突っ込むつもりはないようで、俺の唇にぬちぬちと擦りつけるような動きに逆らわず、邪魔にならないように舌尖を当てた。

ジェイドは本当に俺がジェイドのものを舐めているという光景に興奮しきっていた。次第に息が上がってくる。小さく俺の名を呼びながら、俺の唾液と先走りであっぷりと濡れた先端を俺の唇へ押しつけ、気持ち良さそうな声が吐息交じりに落ちてくる。

俺がその果実のような先端を舐めてちゅっと吸い付くと、ジェイドは俺の頭を固定するように掴みながら射精した。

「あっ、ああっ……！」

ぴゅ、ぴゅくと俺の口の前で白い子種が飛び出してくる。俺の顔に、唇に、何度も熱いジェイドの欲望がぶつかる。口を開けて受け止めようと思ったが、ジェイドの先端から飛び出した白濁はあちこちに飛び散ってしまった。

「ん……すげー量」

ぺろりと唇にかかった分を舐めると、ジェイドが呻きながらまたびゅくりと精を吐く。

もし身体を繋げたら、これが俺の奥に注がれるのか……。

そう考えると、ぞわぞわと奥が疼いた。それが表情に出てしまったのか、ジェイドは俺の腕を掴んで立ち上がらせると、俺の唇にしゃぶりつくように吸い付いた。

「んんっ、んちゅ、まつ、ジェイ、んむっ」

「はあっ……ん、ニール、ニールっ……!!」

淫らな匂いの中そんな風にキスされたら、またその気になる……! 流石に部外者が他人様のシャワーブースで何度かはまずいだろ!

ジェイドの身体を離そうと力を込めるも、まだだめだと抵抗される。流石にジェイドだって俺の理性を溶かしきって最後までやりきるつもりはないだろうが、このまま流されるのはよくない。

行為に切りがついたからか、カツと理性が力を持った。

夢中になって俺の唇に吸い付くジェイドに、俺は僅かに唇が離れた隙を狙って、自分からジェイドへキスを返した。ちゅううっつと吸い付き、ジェイドのペースを乱す。我に返ったように動きを止めたジェイドを見て、ほっと息をついた。

「え、ニール……?」

「これ以上は駄目だ。止まらなくなるだろ」

「私は困らないよ？」

「俺が困るんだよ」

冗談とも本気とも取れる言葉に、俺はシャワーをあててもう一回身体を洗いながら直球で返した。

「ったく、自分がぶっかけたものごとよくキスなんかできたな」

「君の口元があまりにも私を誘っていたものだから」

ジェイドの表情の中に苦笑いのようなものを感じた。何に対する苦笑いなのか。もしかしたら、気持ちの昂ぶったジェイドに、半ば押し切られる形で挿入される可能性があったのかもしれない。ジェイドがそうしなかったのは、俺への気持ちの伴ったものであるからか。俺が言った『約束』を大切に思っているという意思表示でもあるのだろう。

俺ももっと耽りたい欲求がないわけじゃなかったから、逃げるように視線を逸らしてしまった。

「……煽って悪かったよ」

「いいや。私が君の魅力に抗えないだけだ」

歯の浮くような言葉が連なる。正面切って口説かれるのは戸惑いや羞恥も大きい、ジェイドの人柄のせい、決して嫌な気持ちにはならない。

「今日は君を帰そう。君の家でゆっくりと話もしてみたかったけれど、それだけで終われるか不安だ」

ジェイドはそう言うのと、ようやく自分の身体を洗い始めた。そして、宣言通りシャワーの後、早々に俺を家に帰した。

ありがたいやら、もう少し押されてもよかったかもしれないとやきもきするやら。帰宅した後もジェイドとの行為が思い起こされて、俺は仕事の準備もそこそこに、思春期のガキみたいは何度も一人でイット。潤滑油と体液でぐちゃぐちゃになった尻の穴を洗うときも、軟膏を塗って後処理をするときまでも。どうしようもなく勃起した俺自身を扱きながら、ジェイドの色っぽい温度が頭から離れなくて、誰にも許したことの無い場所がいつまでも疼いて仕方なかった。